

葉山港とヨットのあゆみ

元所長 福谷 清

葉山町は「夏は避暑地、冬は避寒地、終年快適に暮らせるこの土地柄は有り難い」詩人堀口大学氏が「葉山ぐらし」の中で気候温暖なこの町をこう讃えました。

当町は明治22年(1889年)木古庭・上山口・下山口・一色・堀内・長柄の六ヶ村が合併し村となり、大正14年(1925年)に町制がしかれ、葉山町となりました。

その間、葉山は、ドイツ人のベルツ博士やイタリア公使のマルチーノにより世に紹介され、名士の別荘の建設は引も切らず、明治27年に葉山御用邸が竣工するに及び「光栄ある葉山」として煙突のない、住宅と観光という今日の町のスタイルが出来あがりました。

また、昭和天皇が皇位を継承され、昭和発祥の地としても歴史に名を刻んでおります。

葉山港は、相模湾の東側の湾奥、三浦半島の頸部に位置し、リアス式海岸の特徴である自然の地形に恵まれ、古くから沿岸漁業の拠点港として、また、わが国近代ヨット発祥の地として知られています。

葉山港は、従来錨摺港と呼ばれていましたが、昭和39年に港湾法の適用を受けて地方港湾葉山港として現在に至っています。

わが国にヨットが伝えられたのは、明治15年(1882年)、外人ヨットクラブが、横浜港の通称フランス波止場、現山下公園に出来たのを初めとしています。

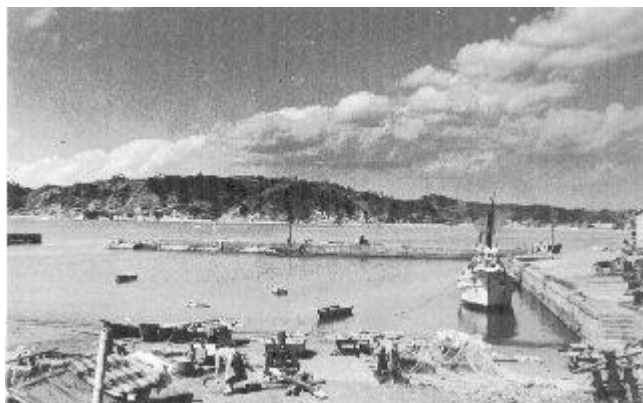
葉山の海では、別荘誕生期の大正初期のころからレジャースポーツとして相模湾に白い帆を見せていました。

本格的なヨットは、その頃、森戸海岸にあった慶応大学水球部の合宿所で、部員たちが「インデペンデンス」と名付けた6メートルのキャビンの付いたヨットを持って湘南の海を帆走していました。

当時、この船は神奈川県下の学生ヨットでは先駆的ヨットとされていました。

葉山港が「湘南ヨット」のメッカとしての名おあげたのは、昭和10年(1935年)錨摺の漁港改修工事完成からであります。

改修工事は、地元葉山町堀内在住の「味の素」社長鈴木三郎助氏が私費を援助して近代施設に改修され、港内の一部がヨットも利用できる施設となりました。



港近くには、葉山町漁業協同組合が建立した金子堅太郎伯爵題字の「船泊竣工記念」の碑があります。

これは、港湾の整備が地元漁師たちの悲願であったことが伺えます。

完成後は、漁業者はもとより、学生、実業団等、クラブのヨット基地として四季を通じヨットマンで賑わい、日曜祭日には、沖合いでレースが開かれました。



葉山港でのヨットがさらに評価をされたのは、昭和30年(1955年)に開催された第10回国民体育大会のヨット競技会場になった時からであります。

この大会には、昭和天皇・皇后両陛下もヨット競技をご覧になられました。

町民、関係者は、「ヨットの神奈川・葉山の面目にかけても立派に成功させよう」と港の整備、競技の運営支援に力をいれました。

「神奈川体育史」には、大会について「全国の選手から異口同音に過去9回のうちこれほど立派なものはないと賞賛を受けたのは、ヨット連盟の喜びのみならず神奈川の誇りである」と感激的に記されております。

東京オリンピック前年の昭和38年(1963)には、10月12日から15日まで、東京国際スポーツ大会のヨット競技も開かれ、港には初めて世界の各国旗がひるがえりました。

また、葉山のヨットは、石原慎太郎氏が昭和31年(1956年)一橋大学在学中に発表した小説「太陽の季節」が芥川賞を受賞し、葉山のヨットが一躍若者たちの羨望の的となったことは、あまりにも有名な話であります。

葉山港は昭和30年の神奈川国体のヨット競技会場、昭和39年東京オリンピックのサブハーバー等に使用され、名実ともに「わが国ヨット発祥の地」として重要な役割を果たしてきました。

しかし、その後、海洋性レクリエーションは、ますます盛んになり、ヨット、モーターボートが増加し、葉山港も保管隻数の増加、施設の老朽化など、港として十分な機能が発揮できなくなって来ておりました。

葉山港が平成10年かながわ・ゆめ国体での成年女子ヨット競技会場として選ばれたことを契機に、再びヨット競技が広く開催でき、一般の人々も海に近づきやすい空間の創造を中心に掲げ再整備が行われています。

この整備には四つの目標を掲げています。

1. ヨット競技の拠点づくり

常時、ヨット競技開催の可能な機能、空間を確保し、海洋性スポーツ振興に寄与します。

2. 集い憩う空間づくり

誰もが気軽に利用でき、憩うことが出来る広場や空間を創出すると共に、より多くの人々が訪れることが出来るアクセスの向上を図ります。

3. 海、ヨットとの出会いの場づくり

大人から子供まで海洋スポーツを楽しみながら学べる研修の場を創出し、レンタルヨット制度などにより、誰もが気軽にヨットを利用できるようにします。

4. 使いやすい空間づくり

施設の更新、分離化により、漁業利用とレクリエーション利用の分離を図るとともに、利便施設を充実し、サービス水準の向上を図ります。

再整備計画の具体的内容は、埋立てを1.2ヘクタール行うことにより、臨港道路130m、緑地2100㎡、駐車場5500㎡(130台)、大会用ビジターヤード124隻分の保管地などを設ける計画となっています。